



九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No. 128

2010(平成22)年3月14日(日)発行

<1879年3月14日、世界最高の理論物理学者で平和主義者アインシュタインの誕生日>

ご存知でしたか 昭和20年2月16日東北地方初の空襲は“原町”でした 2月16日原町紡織工場で4名、さらに8月9・10日には9名の犠牲者が発生

硫黄島奪取の前に 原町市民自身、特に若い世代や転入の方にもあまり知られていない史実ですが、アジア・太平洋戦争の末期の昭和20年2月、米軍は硫黄島を奪取する(2月19日)前に東海、関東、東北部の飛行基地を攻撃破壊し、本土の飛行機が飛べない状態にしておく必要がありました。そこで東北地方で初の空襲(2月16日)が、陸軍飛行場のあった「軍都・原町」だったのです。

昭和20年2月16日 原町紡織工場での犠牲者 (『原町空襲の記録』から)



斎藤和夫



鈴木小松



大原ヨシ子



星 スズイ

いた教員で、この日は高等科の生徒を引率して原町紡

鈴木小松は原町に下宿し、原町国民学校に勤務して

斎藤和夫 一七歳(双葉)

星 スズイ 二二歳(石神)

大原ヨシ子 一九歳(太田)

昭和二十年二月十六日、東北初の空襲が行われたのはこの原町飛行場が狙われたからであった。同日、米軍は硫黄島攻略を開始し、迎撃を防ぐため先制攻撃を行った。原町飛行場に隣接する原町紡織工場では四人の犠牲者が発生した。

二 原町空襲の記録 (執筆 二上英朗さん)
二月十六日 雲雀ヶ原の空に飛行機が初めて飛翔したのは大正六年(一九一七)、民間の国産機「藤号」である。次いで同八年(一九一九)には陸軍飛行隊の航空演習が実施された。こうした演習を背景に、昭和十一年(一九三六)には原町飛行場が開場され、原町は飛行場のある町として軍都の一つとなったのである。

この号は、南相馬市発行の『原町市史』十一巻「原町空襲の記録」、二〇七、二〇八ページをそのまま執筆者の許可を得て、転載させていただきました。

織工場に到着。教員控え室で休んでいたところであった。斎藤和夫は相馬商業学校の生徒。勤労動員で通勤していたが、満州鉄道に就職が決まっていた家族は喜んでいたのである。この日の朝は食堂で朝食を摂っていたところであった。星スズイと大原ヨシ子は、女子挺身隊員。午後からの勤務に備えて自室にいた。

空襲警報は鳴らなかった。朝方、いきなり連合軍の艦載機の銃撃が加えられたのである。

戦争は遠い戦場のことでなく、銃後の郷土でも犠牲者を出した。双葉からかけつけた斎藤和夫の母親は「なんでもうちの子が」と嘆いたという。大原ヨシ子は銃撃で腕がちぎれた。家族が自宅に持ち帰り、猫にかじられないように押し入れに入れて置いた。のちほど出してみると、それは壊死して大きく膨れあがっていたという。

原町陸軍飛行場には、最新鋭の戦闘機「隼」が配備されていたが、戦力の温存を理由に、迎撃に飛び立つことはなかった。

八月九日 再び原町が空襲されたのは昭和二十年八月九日のこと。陸軍飛行場と原町機関区などが集中的に狙われたほか、無差別に民家も襲われ、自宅で被弾するという悲劇があった。この日、三人の犠牲者が出た。

木幡 貢 二六歳(大甕)
木幡孝夫 四歳(大甕)
高橋イク 三九歳(太田)

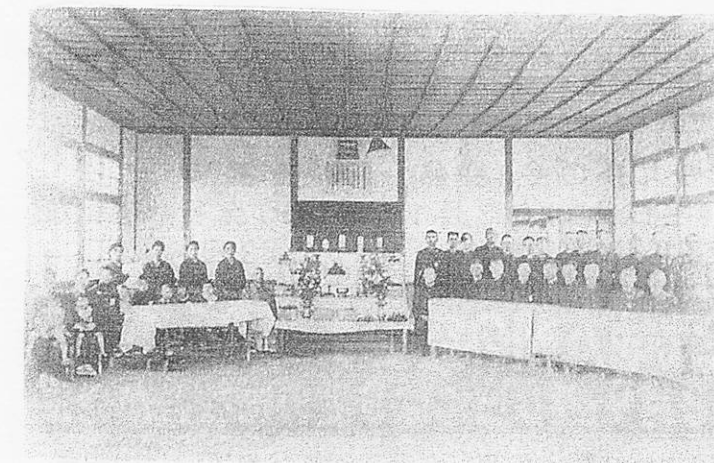
南萱浜の木幡俊雄家では、弟の貢が首から喉を銃弾に貫かれて即死し、息子の孝夫も下腹部に銃弾を受けて翌日死亡した。幼児であった孝夫は「水飲みでえ、水飲みでえ、あつちぐてもいいから飲みでえ(汚なくてもいいから飲みたい)」と訴えながら死んだ。母キミヨは「どうせ死ぬんだから飲みさせてやればよかった」と悔やんだという。(裏面へ続く)

(表のページより)

上太田の主婦高橋イクは、病弱な夫と、その母、祖母の世話で避難が遅れた。爆弾の破片が腹部にめり込み、苦悶した。近所に住む叔母の松本ミノが駆けつけると、あまりの苦しさには、「おミノあんちや、くびってくれろ、くびってくれろ(首をしめて殺してくれ・楽にしてくれ)」と哀願し、一人娘の行く末を心配しながら亡くなったという。

八月九、十日の空襲は東北最大の攻撃となった。とくに鉄道が狙われ、負傷する機関士が続出した。十日には、駅構内で乗客の一人が避難の最中に死亡している。

九日一〇時ころより無線塔が狙われ、ついに二発のロケット弾が命中し、黒煙を上げた。この前後、萱浜の集落で何軒もの炎上家屋が出たほか、家畜の馬までまぎぞえになった。小浜、太田でも全焼家屋が出たのである。



▲昭和20年9月 機銃弾の痕が痛々しく残る原ノ町機関区の合同慰霊祭。(写真・二上ミドリ氏提供)

二月の空襲で被害者を出した原紡工場もまた今回も執拗に狙われた。一度は消火されたものの、三発の直撃弾が落とされ、午後五時ごろから黒煙を発して燃え上がり一週間にわたって燃え続けた。

八月十日 最大の被害は十日、原ノ町機関区で出た。

小林安蔵	四五歳	検査掛
酒本幸蔵	四一歳	検査掛
志賀照雄	四一歳	検査掛
二上兼次	三八歳	検査掛
高橋直	三四歳	検査掛
新妻喜博	一六歳	技工手伝い

機関車車庫に隣接する検査掛詰所の防空壕に避難した一〇人の機関区員のうち六人が、至近距離の車庫に命中した爆弾の直撃を受けて死亡した。

この日の空襲では、レールがアメ状に吹き飛ばされ、跨線橋に巻きついた。

駅東にあつた帝金工場は軍需工場でもあり、相当被弾した。相馬農校をはじめ、あらゆる学校校舎も銃撃された。これらの校舎は、郷土部隊の兵舎がわりに使用されており、情報は細部まで米軍の手元にあつたため、駅前の石川組原町製糸所跡なども攻撃されている。

こうしたなかでも、原町国民学校(現原一小)は、昼すぎ、校舎中央に直撃弾を浴びて破壊された。当日の学校日誌『原町国民学校日誌』から記録を引用してみる。

八月十日金曜日、天候晴、夕立、温度八七(摂氏三〇・六度) 記事一、朝ノ引続キ敵機来襲ナリ、

午前中三回来襲正午過間モナク数機編隊、敵ナリ、
第一弾職員室ラシク火柱立ツ、第二、第三モ同様ナリ、
第一校舎、中央第二、三校舎窓破損ス、
一、当分臨時休業

原町陸軍飛行場の飛行機は、またもや迎撃に飛び立つことはなかった。

(以上の記録についてさらに詳細な記録は昭和五十七年九月三日発行の、二上英朗氏著『原町空襲の記録』を「ご覧ください」)

訂正

上記のように、「原町空襲は東北地方最初の昭和20年2月16日」と、終戦の数日前の「8月9日・10日」で、会報No.126『戦争体験』の「8月10日・11日」は誤りでした。また「仙台空襲は昭和20年7月10日」午前0時3分から2時間半の大空襲でした。編集者がしっかり再確認しないまま、歴史的に重要な日付なのに間違えてしまいました。お詫びして訂正いたします。



■ この「原町空襲の記録」の執筆者二上英朗氏<写真>は、次のような郷土原町に関わる貴重な著作を出版されています。『原町無線塔物語』『巨大無線塔が消える!』『原町無線塔六十年史』『原町空襲の記録』『昭和史への旅』『秋市にサーカスが来た頃』『朝日座、わが青春の活動写真館(朝日座全記録)』『遙かなり雲雀ヶ原・原町陸軍飛行場ものがたり』など多数。